

ま え が き

岡山県北西部の旭川流域において温泉郷・湯原町を懐深く抱きかかえる中国脊梁山脈鋳曲山塊北麓から北へ伸び、蒜山火山系山塊南麓高原に至る広大な蒜山地域5か町村にニュージーランド産ジャージー種導入牛の第1陣94頭が到着したのは今から半世紀前の昭和29年（1954）10月28日であった。

上記の5か町村とは川上村、八束村、中和村、二川村、湯原町であり、そのうち二川村と湯原町は昭和31年（1956）に合併して湯原町となり、蒜山地域は4か町村で構成されることになった。

昭和29年（1954）以降、同種牛のニュージーランドやオーストラリアからの集団的導入は、同35年（1960）まで継続され、その頭数は825頭に達している。ちなみに外国産ジャージー種牛の集団的導入は、農林省が昭和28年（1953）度から開始した「集約酪農地域建設」パイロット事業によるもので、同35年（1960）までに北海道（日高、根釧）、青森（十和田）、岩手（岩手山麓）、群馬（浅間）、秋田（鳥海山麓）、山梨（八ヶ岳）、長野（八ヶ岳）、静岡（富士山麓）、岡山（美作）、佐賀（天山）、熊本（阿蘇）、宮崎（霧島）の1道11県にわたる13地区に7,776頭が導入された。なお、岡山県の美作地区は蒜山地域と津山市北部に分かれている。

蒜山地域は古くから役肉用牛黒毛和種の繁殖・育成地帯であり、当時の農業経営は水稻、役肉用牛、煙草を主作目とし、また、林産物収入に依存していた。第2次世界大戦の敗戦の翌年、昭和21年（1946）に岡山県農業会は酪農奨励計画を策定し、酪農指定町村を定めているが、旭川流域では勝山町、久世町、落合町の3町が北限となり、その上流域である蒜山地域4か町村は酪農不適地の烙印を押されていた。そのため4か町村は昭和25年（1950）に積雪寒冷単作地に指定され、農業振興目標として「水稻作を中心とした有畜多角経営の完成と林産振興」を掲げ、乳牛の導入とは無縁であった。

しかし、その酪農処女地・蒜山地域は半世紀の時空を超えて、ジャージー種牛の一大酪農地域となり、本書執筆中の平成15年（2003）の時点で同種牛の飼養頭数は2,756頭を数え、全国の同種牛頭数9,756頭の28%を占め、これに次ぐ熊本県阿蘇地区は蒜山地域の半分に当たる1,343頭に留まっている。一方、他の集約酪農11地区の飼養頭数はいずれも500頭以下で、当該県内の各地に散在し、ジャージー種牛集約酪農地域形成は失敗に帰している。

蒜山地域4か町村ではジャージー種牛導入後、昭和38年（1963）に至る酪農普及期を経過した時点から、農業近代化の潮流のもとで、酪農展開のパターンに2極化が起り、川上村と八束村は発展型、中和村と湯原町は衰退型に分化し、蒜山酪農地域の広がりには蒜山盆地部の川上・八束両村に縮小される結果となっている。

川上・八束両村在住の酪農家は昭和31年（1956）1月に蒜山酪農農業協同組合を結成し、同年7月に竣工した零細規模の牛乳処理加工場でジャージー種牛乳の市乳製造・販売を開始し、酪農専門農協として農・商・工の三位一体的事業、すなわち現代農林用語で言えば地域酪農業の「六次産業化」事業に着手したのである。しかし、その六次産業化事業は、既存の巨大なホルスタイン種牛乳市場の厚い壁に阻まれ、昭和50年（1975）代末頃まで続く長い苦節の時代を耐え抜き、同60年（1985）代に入り、「ひるぜんジャージー牛乳」の銘柄の確立とともに、ようやく軌道に乗ったのである。

蒜山酪農協は、地域酪農業の六次産業化の進展に合わせて個別酪農経営の展開方向を明確に示し、一方、組合員は酪農生産技術体系を確立し、その適用により自家酪農経営の発展を図り、両者の集団と個の緊密な相互連携のもとで、ジャージー種牛乳の生産と乳製品の製造・販売を行い、同時に都市住民との交流等により、酪農地域の形成という第1ステージを乗り越えたのである。

本書「蒜山酪農地域の形成」は、全3部作シリーズ「蒜山酪農地域の形成、そして農山村の変容」の第2部として、第1部「1950年代の蒜山地域」に続くものである。

本書の記述のねらいは、蒜山酪農地域形成の動機付けとなった行政主導型ジャージー種牛の集団的導入及び酪農地域形成を支えた公共的草地改良事業の実施、個別酪農経営の展開、そして地域酪農業の内発的発展に先導的役割を演じてきた蒜山酪農農業協同組合の事業活動、さらに酪農業への公的教育・試験研究機関の貢献の6項目に亘って詳述し、昭和29年（1954）から平成12年（2000）まで約50年間における蒜山酪農地域形成の全貌を明らかにすることである。一方、上記したように蒜山酪農地域形成は国家的パイロットプランに基づく岡山県の強力な行政的インセンティブによるものであり、したがって、その行政的事業の事後評価は欠かせない重要課題であり、それを果たすために記述を思い立ったのである。

本書には調査・統計資料に基づく図表を数多くちりばめ、表現が冗長に過ぎるとの謗りを免れないが、ただ読者の寛容を請う次第である。

三秋 尚